渇水　　R01,7,27　P50　　佐橋　稔雄

二月から愛知県の豊川市に住むようになって以来、良い天気が続いた。三月は菜種つゆといって雨がよく降り、春先の植物がよく伸びる時である。それなのに、今年は雨があまり降らなかった。それで、あちこちへと出歩く事ができ、町の内容もずいぶん分ってきた。

市内を南北に流れる佐奈川の堤防を、日課として歩くことにしている。川べりを歩いていても、佐奈川に水はあるが、その水が流れているという感じは、あまりしなかった。川幅は二m～三mくらいで深さは十センチくらいであろうか。この川に水のせせらぎの音がないのも変だと思っていた。五月になると宇連ダムの渇水の知らせが、ＴＶで報じられた。やがて、そのダムの貯水率は零％になった。

そこで豊川市を含む周辺の地形を地図で調べてみた。豊川市は三河の東側に位置しており、豊川市の水は、北に十キロ離れた宇連ダムを水源にしている。周囲の山は標高千mくらいである。宇連ダムの水が無くなったら、さらに北に十キロ離れた佐久間ダムにお願いをする、とＴＶは報じた。佐久間ダムは、南アルプスの標高三千mの山を水源にしている。その水源はダムの東側にある。このダムの貯水率は五十％であった。どうしてこんなに違いがあるのだろうか。

たぶん、雨が降った後、その水を溜（ため）る山の構造による、と推定してみた。山は手のひらよりも大きな石と、手のひらよりも小さな石から出来ていると考えてみる。大きな石は人の何倍もある物まで含まれる。小さな石は米粒よりも小さな物まで含まれる。大きな石は、元高温で溶けていた溶岩が、温度が下がり固まった物である。小さな石でも地球の内部にあって、他の石の重みで互いの隙間が小さくなり、やがては合体して大きな石になる。

大きな石は、地表の近くでは、昼と夜の温度変化、夏と冬の温度変化で伸び縮みが起き、裂け目が入り、割れ目が出来て、分割されてゆく。一方、空気中の炭酸ガスが水に溶けて、炭酸水になり、石を溶かしてゆく。石の割れ目に炭酸水が入ると、石は割れ目を溶かし、割れ目は段々と大きくなり、隙間ができてくる。隙間の底には小さな石が、雨水と共に入り込む。これで水が流れ出ない入れ物ができ上がる。これは水が漏れ出ない茶碗のような物ではなく、ひび目・割れ目が入ったお椀のような物に相当するであろう。割れ目のあるお椀に水を入れておけば､やがて水は割れ目から全部外え出てゆく。こんな入れ物は、何万年、何百万年、或いは、それ以上の年月をかけて作られていく。

水が入った割れ目のあるお椀、これを単位として、山の頂上から、麓の高

さまで、山全体がお椀を積み重ねて作られている、と推定してみる。このお椀が山全体で、いくつあるだろうか。標高千mの山と標高三千mの山では、お椀の数が違う。単純に計算してみると、高さが三倍だから、平面では、九倍になり、立体では、二十七倍になる。このお椀が山が持つ保水力であり、お椀の数の違いが保水力の違いとなるであろう。

降った雨が地面に吸い込まれてゆけば、山全体のお椀の中に、水が入りこむ事になる。お椀の割れ目から水がしたたり落ちる。上のお椀から下のお椀へと。お椀の数は山の形にもよるが、千mの山と三千mの山では十倍くらいの違いはあるだろう。雨が止んでも、山の下の方にあるお椀からは、水はいつまでも外え流れ続ける。山の水は涸れて無くなる事はない。

上のように推定すれば、宇連ダムが干涸（ひからび）ても、佐久間ダムがゆうぜんと水を溜ている姿は納得できる。

六月に梅雨が始ると、宇連ダムの渇水は解消していった。佐奈川の流れは大きくなった。水のせせらぎの音が聞えるようになり、ほっとした。川自体が大きくなった感じがする。堤防に生えている雑草も良く伸びた。あちこちで雑草を刈る音がする。公園の、水の遊び場の水も復活した。親と一緒に来て、水浴びをする幼児に出会った。うれしそうだった。佐奈川で飛込みの遊びをする中学生が数人いた。それが何時間も続いていた、余程楽しかったのであろう。

温水プールには、泡の出る風呂がある。これは泳ぎには直接関係しないので、渇水中は停止していた。しかしこれも復活した。ありがたい事である。プールの風呂は、トレーニングの後に水着のまま入る風呂である。年寄ばかりであり、ペチャクチャとしゃべくり、皆うれしそうである。水が増えると人々の生活は生き生きと輝く。

割れ目のあるお椀は、７月の梅雨の終りの頃には、山の頂上から麓まで、水で一杯であろう。